

## 「西田幾多郎」と「嵯峨野高等女学校」－矢代仁兵衛、片岡仁志の「念願」－

川口 靖夫

### はじめに

昭和43〔1968〕年4月18日木曜日の早朝のことである。午前6時40分からNHKラジオ番組「人生読本」において「暖簾に生きる」という題目で古稀を過ぎた老翁が「……私は、さっそく東京へ参りまして、日本中学に杉浦先生を訪ずれました。先生は自分が家督相続人であるということをお聞きになって『日本ではなあ、相続人というものは、特に社会人として責任が重いぞ』ということをコンコンと諭され、従ってまた教育ということの必要と、嵯ということの重要性を、強く私に申されたのであります。これは後日、私が、京都嵯峨野に、今日の京都府立嵯峨野高等学校を創設いたしましたのも、思えばこの杉浦先生のお言葉によったことと、つくづく思うのであります。……」と語る声が全国に流れた(1)。

話のなかにあるとおり、この老翁こそ「京都府立嵯峨野高等学校」(以下、嵯峨野高校と略記)の前身である「京都府立嵯峨野高等女学校」(以下、嵯峨野高女と略記)を創設した矢代仁兵衛その人である。私立学校ならいざ知らず、公立学校は公費で建設すべきものであるが、嵯峨野高校は、矢代仁兵衛という個人の私財によって設立された稀有な学校である。数ある府立高校の中で個人の寄付によって設立された高校は、嵯峨野高校以外、筆者は寡聞にして知らない。

嵯峨野高校の歴史あるいは沿革について記された最も古い資料は、嵯峨野高女が開校した年の7月に発行された学校機関紙『嵯峨野』創刊号(1941年7月14日付)である(2)。そこでは「本校の創設」として、創設に至るまでの経過が記されている。次いで、昭和36〔1961〕年に発行された『嵯峨野<10年誌>』(10年誌編集委員会編)がある。そこでは「沿革」として、昭和15〔1940〕年10月～昭和34〔1959〕年3月までの期間の事項が年表風に記されている。また、嵯峨野高校第2代校長・藪田尚一が『嵯峨野新聞』第50号(1962年7月5日付)に「嵯峨野高校の歴史について」を寄稿しているが、「本校は元京都府立嵯峨野高等女学校と称し、昭和十六年四月矢代仁兵衛氏の篤志によって創立を見た」との記載があるのみで、嵯峨野高女に関する詳しい記述は略されている(3)。これらの資料は、嵯峨野高校が矢代仁兵衛の創設になることは記しても、矢代仁兵衛が如何なる思いで学校を設立しようとしたのか、その動機あるいは創設に至るまでの経緯に関する記述はない。『京都府立嵯峨野高等女学校創立60周年・京都府立嵯峨野高等学校創立50周年記念CD-ROM』(2000年3月20日発行)にも沿革が記されているが、「昭和15年10月20日：矢代仁兵衛氏の京都府知事に対する女子中等学校設立のための総建築費及び敷地寄付の申し出あり。昭和15年10月25日：京都府参事会は上記寄付の採納を議決。昭和16年4月1日京都府立嵯峨野高等女学校として開校」と記されているだけである。

こうした状況を踏まえ、本稿では、矢代仁兵衛が如何なる思いで学校を創設するに至ったか、その動機から創設までの経緯を明らかにし、開校された嵯峨野高女では如何なる教育が行われたのか、その一端について述べたいと思う。なお、本文においては敬称を省略させていただいていることをあらかじめお断りしておきたい。

## 1. 矢代仁兵衛（1893～1976）の思い

明治26〔1893〕年9月21日、京都市右京区（旧葛野郡川岡村）牛ヶ瀬にて、津田八郎兵衛・とくに四男が誕生、善作と名づけられた。津田善作は、大正2〔1913〕年、京都府立第二中学校（現、鳥羽高校）を卒業後、岡山の第六高等学校を経て、京都帝国大学法学部独法科に入学。大学在学中に岡崎の下宿先から徒歩で天竜寺の僧堂に通い、禅を学ぶとともに、老師と雲水の作務（仕事）に津田善作は心を打たれる(4)。また、馴染みとなった清水道の某茶店の老婆から、茶のもてなしを受けた時の強い印象が、後年、茶の世界に関心を持つきっかけとなったという(5)。大正10〔1921〕京都大学を卒業、大正12〔1923〕年に室町の西陣織の老舗、矢代家の婿養子となり、昭和2〔1927〕年、34歳にして「第七代矢代仁兵衛」を襲名することとなった。矢代仁兵衛には、『樂獨』・『自愛』という2冊の随筆集がある。ともに市販されたものではなく、関係者に配布されたものである(6)。



矢代仁兵衛氏

さて、『樂獨』のなかで矢代仁兵衛は、「嵯峨野に学校創設の由来」と題して学校創設を思い至った経緯を9項目挙げている(7)。嵯峨野高女創設後30年ほど後に回想して記されたもので思い違いの部分もある。『樂獨』という著書は今や目にすることが困難であることから、やや長文になるが、以下その9項目を引用し、それぞれについて補足・検討を加えたいと思う。枠囲みの部分が引用箇所である。

第一、かねてから相互扶助と、社会恩とを深く感じていた私は、私なりに何か世のため、人のためにお役に立つものを、と捜し求めていた。たまたま大正十年ごろ、伊庭貞剛翁の紹介で、杉浦重剛先生に親しくお目にかかった際、教育と躰の重要なことを説き聞かされて、大きな感銘を受けた。学校の必要を痛感し、そのことが常に念頭にあった。

大正10〔1921〕年頃の話である。矢代仁兵衛は、大学を卒業したことを報告するため、大津石山の琵琶湖を見おろす山荘に悠々自適していた伯父（兄嫁の父）、伊庭貞剛（1847～1926）を訪ねた。伊庭貞剛は第5代住友総領事を務めた人物で、企業の社会的責任を唱えた先駆者でもある。この時、矢代仁兵衛は伊庭貞剛から卒業祝いとして3通の紹介状を受け取った。東京日本中学校の杉浦重剛（1855～1924）、永観堂居住の儒者福田静処（1865～1944）、相国寺の橋本独山（1869～1938）宛の3通である。矢代仁兵衛は、この紹介状を頼りに杉浦重剛を訪ねた(8)。その時の内容は、本稿冒頭で記した。この時、杉浦重剛から諭されたことを心に留め続けたことが、学校創設につながる動機となる。

第二、時局緊迫化した昭和十五年七月七日、例の七・七禁令（繊維製品に金糸、銀糸の使用禁止、その他）が発せられ、わが繊維業界を震動させたが、私の店は対処を誤らず、幸運にもその難を免れた。このようなことで、かねての念願の学校を創設する決意が、固められることになった。

昭和12〔1937〕年、盧溝橋事件を機に始まった日中戦争が長期化するにつれ、物資統制が強化され、昭和15〔1940〕年7月6日、商工・農林省令「奢侈品等製造販売制限規則」（いわゆる七・七禁令）が発布、翌7日施行された。七・七禁令は、指定された物品の製

造・販売を原則的に禁止するもので、指定された物品は高級衣料、貴金属、装飾品、食品など消費財全般に及び、1個10銭以上の寿司、1個20銭以上の天麩羅などまでが販売禁止となった。この七・七禁令によって転廃業を強いられる中小商工業者が続出し、発布翌月には「贅沢は敵だ！」のスローガンが掲示され、国民生活の戦時色が一段と濃くなっていった。金糸・銀糸を使う織物など贅沢品の製造・販売も禁止された。この時、矢代仁兵衛は避暑先の舞子にいたが、発布された翌日、店の支配人から報告を受けた。当時の織物製造・販売業界は、この禁令に抵触する商品を山ほど抱えており、各店は、争って商品の投げ売りを始めた。しかし、矢代仁兵衛は、織物に織り込まれて装飾用に使用されている金糸・銀糸は化学加工によるもので、これを関係当局が金・銀と錯覚したのは非科学的措置であると考え、多くの店が商品の投げ売りをするなか、しばらく様子を見ることにした。矢代仁兵衛の思惑どおり、この省令の織物に対する部分は数か月後に廃止され、損失を被ることもなく終わった。矢代仁兵衛は、損失を免れたことを消極的に儲けたことととらえ、学校設立を決意する。後年、矢代仁兵衛は「嵯峨野高校は、いわば七・七禁令の落とし子である」と述懐している(9)。

第三、丁度その時、時の首相であった近衛文麿公が入洛され、平安神宮改築造営奉賛会長として一夕、南禅寺畔のある料亭に、われわれを招待されたことがあった。その席に政治家三土忠造氏(文相の経歴もある)も同座しておられ、しきりに英国のイートン中学校の校風を紹介して、いろいろ説明を加え「新たに学校を創立されるからには、ぜひこのような立派な学校を目標にされたら」と、熱心にイートン風の学園を推称された。それによって私の学校を建てるという考えは、具体的な構想に向かって一歩前進した。

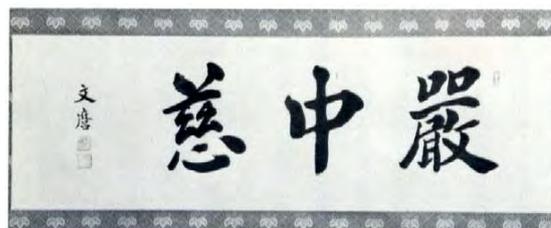
「丁度その時」というのは、前項の「七・七禁令」の発布時期と考えれば、「昭和15[1940]年7月7日」前後、数ヶ月間と思われる。近衛文麿(1891~1945)の首相在任期間は、第一次(1937.6.4~1939.1.5)、第二次(1940.7.22~1941.7.18)、第三次(1941.7.18~10.18)であるから、第二次近衛内閣の時期に該当する。「平安神宮改築造営奉賛会」とあるのは、「孝明天皇奉祀奉賛会」のことであり、皇紀2600年(昭和15年)を迎えるにあたり、孝明天皇を平安神宮に合祀するため、近衛文麿を会長として、京都府・市・商工会議所及び財界の有力者によって、昭和13[1938]年5月10日結成された。結成の前年、昭和12[1937]年7月24日には「孝明天皇奉祀準備委員会」が発足しているが、矢代仁兵衛は準備委員会発足当初より解散(昭和17年6月14日)まで、奉賛会の常務理事を務めている。元々平安神宮は桓武天皇1座を奉祀していたが、孝明天皇合祀により本殿も新築され、本殿が東西の2座となり、昭和15[1940]年10月17日、「東本殿遷座祭」、10月19日に「西本殿鎮座祭」が執行されている(10)。

さて、「近衛文麿との会食の時期・場所」を確定することができないものかと、平安神宮に調査を依頼した(11)。平安神宮の社務日誌によると、昭和15[1940]年に限って言えば、近衛文麿が入洛した月日は、2月22日~25日・6月19日~22日・10月4日~6日の期間であり、役員との会食の記録は2月23日の「大市」での午餐会しかない(12)。6月21日の記録には「近衛会長との午餐会が先方の都合により中止。出席者に電話にて連絡」とあり、この日の会食は行われていない。時期を昭和12~17[1937~1942]年に広げてみると、昭和16[1941]年6月14日、祇園「中村楼」にて近衛文麿主催の晩餐会が催されており、

出席者に矢代仁兵衛が含まれているが、三土忠造の名前を見出すことはできない。料亭で奉賛会役員を招いての食事ともなると、当時の宮司（寺田密次郎）も当然出席していたはずだが、社務日誌には、会合や会食に宮司が出席した場合は細かく記載があり、該当する期間においては、上記「大市」・「中村楼」以外、記述はない。

この話に関わることであるが、昭和28〔1953〕年4月10日、嵯峨野高校第4回入学式が挙行され、矢代仁兵衛が来賓として出席、祝辞を述べている。その祝辞のなかで、矢代仁兵衛が「近衛文麿から教育の充実に力を注ぐように、アドバイスを受けた」と述べたことを、その時の入学生、名和修（本校第5回卒業生<sup>(13)</sup>。現、公益財団法人陽明文庫 理事・文庫長）が記憶している。名和修は、陽明文庫（近衛家伝襲の古文書および古典籍等を保存管理している特殊図書館）に生まれ育った人で、幼い頃より近衛文麿の名前を聞いており、矢代仁兵衛の口から近衛文麿の名前が出たもので、他の同窓生は覚えていなくとも自分は記憶しているとのことである。結局のところ、矢代仁兵衛が近衛文麿と会食をしたこと、アドバイスを受けたことは、確かであると思われるのだが、その時期・場所については、確定することができなかった<sup>(14)</sup>。後学の徒を俟つ。

なお、嵯峨野高女創設後の昭和18〔1943〕年、近衛文麿は矢代仁兵衛に「巖中慈」と揮毫して贈っている。矢代仁兵衛は「子弟への躰は巖であって、加える鞭は強くとも、これには慈愛が含まれていなければならない。この清規は嵯峨野にも通ずべきものであると、近衛公のこの学校への心の贈り物」と推察している<sup>(15)</sup>。



『樂獨』より転載

第四、かくて学校創設の意が固まった上は、この学校を公営にするか、私学にするかを決めねばならない。それについてまず相談をかけたのは、かつて京二中（私の母校）の教頭だった、東京武蔵野高校の山本良吉校長であった。同校長を訪ねると「そのような篤志による学校は、目下東京に成蹊学園がある」と指摘され、さっそく成蹊学園に奥田先生を訪問した。校門をはいるやいなや、さすがに山本良吉先生が推薦の通り、落ちつきのある、珍しい、よい学校と直感した。奥田先生の述べられた意見にも、得るところが多かった。このような学風の学校が、わが京都に一つぐらいあってもよい、と私に私学創設への決心がいっそう深くなった。

山本良吉（1871～1942）は、明治28〔1895〕年7月、帝国大学文科大学哲学科選科を修了後、同年9月、京都府立尋常中学校（現、洛北高校）教諭を皮切りに、静岡県尋常中学校（現、静岡高校）教諭を経て、明治33〔1900〕年4月1日、新設の京都府立第二中学校（現、鳥羽高校）に教頭として迎えられた。28歳の若さである。その後、明治41〔1908〕年、京都帝国大学学生監、大正7〔1918〕年、学習院教授となり、大正11〔1922〕年、武蔵高等学校教授および教頭、昭和11〔1936〕年、校長となったが、昭和17〔1942〕年7月12日夜、狭心症のため急逝した。

山本良吉は、京都二中では「鬼の山本」と呼ばれ、修身の時間に「足利尊氏は朝敵であり、楠正成は忠臣であることに間違いはないが、人物という点から観れば尊氏の方が優れて居る」と言ったために「先生は逆賊の尊氏を大忠臣の正成よりえらいと云った。こんな

先生に教はるものか」と生徒たちが奮然数日間ストライキを起こした。良吉はこの中の中心人物十数名を退校処分にしたというエピソードの持ち主である(16)。余談ながら、山本良吉は、金沢出身で西田幾多郎(1870～1945)・鈴木大拙(1870～1966)と第四高等学校の同窓であり、「頭脳鋭敏にして、眼光物の細微に徹し、事に当つて、一々明確な自分の意見と云うものを有つてゐた」というのが、西田幾多郎の山本良吉評である(17)。また、鈴木大拙は、山本良吉と西田幾多郎を比較して「山本は馬のあばれた様な奴で、西田は牛の様にとこまでもつきとめる様な奴だ」と述べている(18)。

さて、山本良吉から助言を受けた矢代仁兵衛は、成蹊学園の奥田正造(1884～1950)を訪問した。奥田正造は、茶の湯の指導者として迎えられたのち、第2代目校長(在任期間:1920～1950)となった人物である。成蹊女学校は、大正6[1917]年、女子教育に関する新しい試みを自由に展開するため、あえて高等女学校令によらない各種学校として発足したが、大正10[1921]年、成蹊高等女学校となった。成蹊高等女学校においては、女子の精神教育または情操教育の一手段として「茶の湯」が重視され、「不言庵」と命名された茶室も設けられている。矢代仁兵衛は、奥田正造の教育方針と、茶道を中心とする生活教育の実践にも深く共鳴し、京都に同じような学風を持つ私学の創設を決心する。

第五、一方、日ごろ昵懇にしていた、家政学園の大島撤水師にも相談したところ、たちどころに篤志者の寄付による学校は、私学が当然だ、とアドバイスされた。

矢代仁兵衛は、婦徳の涵養を趣旨とした高等家政女学校の主幹・大島撤水(1871～1945)にも相談し、篤志家の寄付による学校は、私学が当然とのアドバイスを受ける。

第六、さて、用地も嵯峨野で手に入り、いよいよ工事に取りかかることになった。昭和十五年といえば、日支事変は泥沼の様相を深め、太平洋戦争への足を早めていた折柄として、用材、人材ともに不自由となり、諸事思うにまかせぬ事態に陥った。従って私学創設は至難な見通しとなった。

この部分は、矢代仁兵衛に若干の思い違いがある。土地を購入するため、矢代仁兵衛は、当時の学務部長・鈴木脩蔵と共に内々で敷地の選定に歩き回っている。桂付近、山科付近等の候補地もあったが、矢代仁兵衛は、御室、嵯峨方面を好み、広沢の池から大覚寺の辺り(北嵯峨高校辺りか?)を物色し、最終的に現在の嵯峨野高校の地に決定した。敷地が決定するのは、鈴木脩蔵が「私が京都を去った後」(昭和15[1940]年10月、京都府学務部長から北海道土木部長に異動)と記している(19)。工事に取りかかるのは、昭和16[1941]年9月のことである(後述)。日中戦争が長期化するなか、矢代仁兵衛は、用材・人材ともに不自由な状況下において、私学を創設することは困難と判断した。

第七、当時京都府下では、他府県にくらべて学校の数が少なく、時の知事川西実三氏は、これが善後策に奔走され、同知事から私に協力方を強く要望された。常々同知事の識見や人となりに共鳴していた私は、前記のように私学創設の実現が困難と感じて、ついにやむなく公学として進むことに、方向を転換せざるを得なくなった。

私学創設を断念した矢代仁兵衛は、当時の京都府知事・川西實三(1889～1978、京都府知事在任:1940.4.9～1941.1.7)からの強い要望を受け入れ、公立高等女学校建設費(敷

地・建築費・設備費一切)を寄付することとした。京都府が矢代仁兵衛に女学校の寄付を申し出ることになった背景には裏話がある。昭和12[1937]年、日中戦争が始まり、軍港都市・舞鶴が急激に膨張すると、その子女のために東舞鶴に中学校と女学校を是非作れという要望が軍部を中心に強烈になった。当時であって軍部の要求を拒否することは不可能で、舞鶴市が土地を提供するという条件で2校同時新設が認められ、昭和15[1940]年2月29日、東舞鶴中学校、東舞鶴高等女学校が開校した(現、東舞鶴高校)(20)。しかし治まらないのは、京都市選出の府会議員である。京都市に20数年間、中学校も女学校も増設されていない。来年度には是非京都市に中学校と女学校を増設せよと要求した。前年2校増設し、更に翌年2校増設することは、府財政にとって無理な話であり、鈴木脩蔵は川西實三と相談し、矢代邸を訪ね「男子中学は府費で新設するから、女学校の方は、貴方の独立で建設費を寄付して頂きたい」と懇願したところ、直ちにその承諾を得たという(21)。当時、鈴木脩蔵の下で学務部属官をしていた川瀬章一によれば、この時、矢代仁兵衛は承諾する条件として、男子中学校は府費で建設することを挙げたという(22)。この時、嵯峨野高女と同時期に建設された男子中学校を見つけ出すのに意外と時間がかかったが、京都府立第五中学校であることが判明した(23)。戦後の学制改革の中、昭和22[1947]年、第五中学校内に京都市立上桂中学校(現、桂中学校)が併設され、翌年4月、義務教育独立校舎優先の軍政部の強い指導により、第五中学は第三中学(現、山城)に移転、10月、閉校となった。

第八、工事については日ごろ懇意の竹中工務店、竹中藤右衛門氏(先代社長)に相談した。氏の絶大なる犠牲的協力によって、用材入手不自由な時にもかかわらず、これを押しきって校舎の建設は進捗していった。

矢代仁兵衛が懇意であった竹中藤右衛門(1877~1965)に相談したところ、用材入手不自由な時にもかかわらず、竹中工務店が校舎の建設を請け負った。竹中工務店に嵯峨野高女建設に関する資料が残っていないか問い合わせしてみたところ、嵯峨野高女に関する資料が3点見つかった。一点は当時の施工台帳で「工事名：嵯峨野高等女学校、建築地：京都市右京区常盤段ノ上町、建築主：京都府、設計者：建築主、主任者：小山秀雄、起工年月日：昭和16年9月10日、竣工年月日：昭和17年4月13日、構造・階数：W・F2、建築面積：建 $m^2$ 557 $m^2$ ・延 $m^2$ 1067 $m^2$ 、請負金額：121042円」とある。他の二点は『社報』で、昭和17年5月号に「竣工式」の参列者名等、同年12月号に「11.24. 府立嵯峨野女学校第三期工事(京)上棟式」と記されている(24)。

第九、時局は重大化していたが、校舎も出来上り、昭和十六年に愈々学校事務を開始することになったが、先決問題としては、校長の招聘である。学校の健全な運営と校風の樹立には、人格、見識ともに備わる校長を選ばねばならぬ。当時、妙心寺山内春光院に寓居されていた、京大名誉教授久松真一博士にその人選を依頼したところ、同博士は、西田幾多郎博士の愛弟子で、その時長野県野沢女学校の校長をしていられた片岡仁志氏を推薦された。ここに白羽の矢は立てられた。まずその転出方を長野県庁と交渉したが、そうとう難航した。しかしついに新設嵯峨野女学校の校長として、はるばる長野から招聘することに成功した。

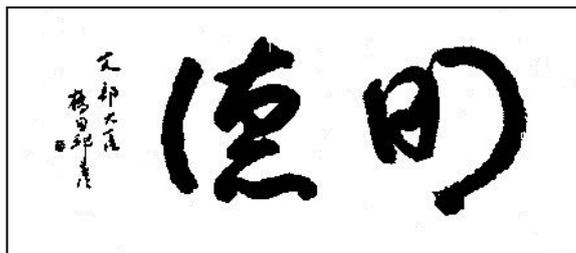
矢代仁兵衛は「時局は重大化していたが、校舎も出来上り、昭和十六年にいよいよ学校事務を開始することになったが、先決問題としては校長の招聘である」と記す。しかし、学校事務が昭和16〔1941〕年に始まるのは正しいが、上述竹中工務店の資料にある通り、校舎は完成しておらず、開校初年度は、府立第一高等女学校（以下、府一と略記。現、鴨沂高校）の校舎を借用して開学した。矢代仁兵衛から校長の人選を頼まれた久松真一は、小西重直、西田幾多郎とも相談し、「禅の心」・「茶道の精神」を取り入れた生活教育の実践ができる人物かつ人格・見識とも備わる人物となれば、片岡仁志をおいて他にはないと、推薦した。しかし、「そうとう難航」した結果、片岡仁志を嵯峨野高女の校長に招聘することに成功する(25)。その背後に西田幾多郎の強い力が働いたことは後述する。

以上のような事情で、この学校創立はさいわいにも順調に、又堅実に運営された。将来、地方文教の上に貢献し、幾多の人材を生むべきわが嵯峨野学校は誕生したのである。公立のよいところと、私学のよいところとを、抱き合わせた校風に特色があった。そしてそれが創立者の念願でもあった。

矢代仁兵衛が目指したのは、「教師中心の官僚主義、形式主義の教育ではなく、生徒中心、生活中心の教育、師弟間の人間的接触を通じて、個々の生徒の行き届いた人格指導の行われうるような生活教育の場を取り入れた」学校の創設である(26)。矢代仁兵衛は女学校を寄付するにあたり、鈴木脩蔵に「自分は以前から現在の日本の教育殊に女子教育についてあきたらなく思っている。日本の将来の中堅となるべきものの中学教育が高等学校進学の予備校的存在となり、型にはまった劃一教育を施していることに不満をもっている。もう少し事務的ではなく、徳育を尊重する特色のある中等学校が欲しいものだと考えていた。殊に現代の女学生にあつては我国古来の美風である温順、貞淑という様な点は影をひそめ、行儀作法に至っては全く言語道断である。もう少し女らしい教育、もう少し情操教育を重んずる特色ある学校が欲しいと思っていた。君がもしそう云う点に於て特色ある女学校を創設するというなら、京都府の事情もわかるから喜んで寄附をしよう」と、その胸の内を伝えている(27)。「公立のよいところと、私学のよいところとを、抱き合わせた校風」を持つ学校の創設という矢代仁兵衛の「念願」を実現するには、どのような学校にすべきかを考え抜いたのが、嵯峨野高女の初代教頭となる田中九三（1941.4～1943.3、嵯峨野高女に在職）である。田中九三（1896～？）は、「新しい学校の教頭として、私は矢代氏の願いである生徒指導をどのようにするか悩み抜いた。そして結論は禅と茶道を教育の基本にする事に決めた。そこで私は自分も茶道の研修をする為に楽吉左衛門氏を訪ね、然るべき師を依頼した。楽氏の推選で、表千家の堀内宗完宗匠が紹介され、嵯峨野高女の茶道を指導していただく事になった」と記している(28)。現在、府立高校の茶道部の多くが裏千家の指導を仰いでいるなか、嵯峨野高校が表千家の指導を仰いでいるのは、ここに端を発する。「禅の心」は「無」であり、「茶道の精神」は「和敬清寂」である。「和は和合の和、調和の和、和楽の和である。……敬とは自己に対して慎み、他人に対して敬うという心持で程子の所謂主一無適即ち専念である。……清はいふまでもなく清潔清廉である、物と心との清である。……以上に加えて心のおちつき、即ち寂が具わる様になったならば申分はない。……僅かの暇を利用して、時間を超越した悠久の自己に悟入すべく、その一挙手一投足にも心のおちつきを宿すことを要求する。これが即ち寂である(29)。」

## 2. 嵯峨野高等女学校の誕生

昭和15[1940]年10月20日、矢代仁兵衛は、建設費として取敢えず57万円を京都府に寄付、同月25日、知事・西川實三は直ちに府議会に諮り全員一致で採納が議決された。校名も「京都府立嵯峨野高等女学校」と決定したが、認可に至るまでには大きな壁があった。当時、京都府学務課の主席属官であった川瀬章一がその間の事情を伝えている(30)。嵯峨野高女の敷地は7000坪ほどであり、当時、軍需工場以外5000坪以上の農地を潰すことは、たとえそれが学校用地であっても許可されなかった。川瀬章一は何度も文部省のみならず、農林省にまで足を運び、矢代仁兵衛の美筆を讃え、是が非でも許可を願い、やっとのことで許可された。軍事最優先の時代にあつて、嵯峨野高女の設置が認可された背景に、当時の首相・近衛文麿の力が少しは働いていたのではないかと推量するのは、筆者の邪推であらうか。かくして、昭和16[1941]年3月5日付文部省告示第180号で「嵯峨野高等女学校」の設置が認可された。文部省告示において、位置が「京都府京都市上京区」となっているのは、府一の住所が記載されているためであらう。なお、当時の文部大臣・橋田邦彦は嵯峨野高女に「明德」と揮毫して贈っているが現存しない。



文部大臣橋田邦彦揮毫（『嵯峨野』第3号より転載）

◎文部省告示第百八十號	
高等女學校令ニ依リ左記高等女學校ヲ設置	
シ昭和十六年四月ヨリ開校ノ件昭和十六年	
三月三日認可セリ	
昭和十六年三月五日	
文部大臣 橋田 邦彦	
名 稱	京都府立嵯峨野高等女學校
位 置	京都府京都市上京區
設 立 者	京都府
修業年限	五年

文部省告示第180号

認可に先立ち、昭和16年2月上旬、府一に事務局が設けられ、生徒募集が開始されている。3月3日の認可後、3月11日に、府一校長・鈴木博也が嵯峨野高女校長事務取扱に任命され、初めての入試考査は、京都府立第二高等女学校（以下、府二と略記。現、朱雀高校）教諭・田中九三を入試選抜委員長として、3月22日（土）より24日（月）の3日間実施され、27日（木）156名の合格者が発表された（志願者210名、倍率1.35倍）。合格者の出身校は、太秦7名、深草第一・御室各6名をはじめとする京都市内の尋常小学校78校150名、その他6名は、府下4校4名、管外2名である(31)。

発表の日の感激を記した一女子生徒（深草第一尋常高等小学校出身）の手記が残っている。やや、長くなるが当時の合格発表を彷彿とさせる資料なので引用したい。

「其の日、私は一人で見に行きました。学校へ着いた時はまだ九時十分前でした。が、もうたくさん来て居られました。門によりかゝつて溜息をついて居る人、ぢつと時計ばかり見て居る人、腰をかがめて下ばかり見て居る人、それ等の人の形は皆まちまちである。けれども心は皆一つである。ぐつと引きしまつた顔を見ただけでもすぐわかる。私もぢつとして居られなくなつて、あつちへ行つたり、こつちへ来たりして居た。先生が何だか半紙位の紙をはられた。見ると発表は午前十時と書いてあつた。十時……もう半時間余り私にはそれが一時間も二時間もの様に長い事に思はれた。やがてたくさんの人が集まつた中で発表の紙は高々とはられた。あたりはしーんと静まりかへつた — 針を落とした音も聞

える位に。カサカサと巻紙が展かれて行く。番号が出て来る。とたんに『嬉しい』と歓喜の声を上げる人、泣きさうな顔をして母のたもとにすがりつく人。一四二番あつたあつた。あゝ私は入れたのだ！私は我にかへつて胸の中でさげんだ。私達は多くの人の中からえらばれて入れたのだ一生懸命勉強して此の幸福に報いよう……と。父母が心配して待つて居る！早く知らして上げなくてはと私は急いで校門の外へ出た(32)。」

70年ほど前の合格発表の光景である。今なら携帯電話で即座にリアルタイムで連絡するところだが、家庭電話も普及していない当時、少女は一刻も早く朗報を知らせに両親が待つ伏見・深草までの家路を胸躍らせながら急いだに違いない。今の我々が失くしてしまった世界がここにはある。

昭和16[1941]年4月11日(金)晴天に恵まれ、午前9時より府一で入学式が挙行された。ここに嵯峨野高女は、その第一歩を踏み出したのである。

校舎はまだ建築されていないため、府一の校舎4教室を借用して授業が開始された。授業が開始されると並行して、校舎の建設が進められていった。昭和16[1941]年5月末までに、土地の登記も完了し、校舎の設計は、当時の府営繕課技師・萩本泰一が担当、矢代仁兵衛とも相談のうえ、何度も修正が加えられ、8月中旬にようやく完成した。8月下旬より測量に着手、9月1日に整地も完了し、9月10日の地鎮祭を迎えた。夜来の浄雨が降りしきるなか、知事・安藤狂四郎(1983~1982, 在任期間1941.1~1943.7)、矢代仁兵衛を来賓として迎え、午前10時より梅ノ宮神社宮司を斎主としてテント内式場において厳粛に執行され、午前11時30分に終了。10月20日基礎工事が始まり、11月末、基礎工事も完了し、12月末上棟式が行われ、昭和17[1942]年4月13日竣工式が行われた。列席者等は右のとおりである。

昭和17年度の入学式は、府一で実施された後、全員で常盤の新校舎に移動、嵯峨野の地において授業が始まった。校舎建築は着々と進み、生徒昇降口2階に茶室も完成し、10月13日午後、茶室開きが、府当局蒲池教学官・萩本泰一営繕技師、鈴木博也府一校長、山崎大耕相国寺管長、妙心寺林惠鏡、大光明寺大津樞堂、矢代仁兵衛、久松真一、松浦竹中組京都支部長等を来賓として秋陽を受けた茶室で厳粛の裡に和敬の気分を讃えて催されている(33)。

しかし、太平洋戦争も次第に激しくなり、校舎の建設は予定どおりに進まず、結局のところ、校舎の完成は、戦後を待たねばならなかった。

竣工式	
府立嵯峨野高等女学校第一期教室	
日時	4月13日午前11時
斎主	梅ノ宮神社
列席者	
建築主	京都府知事代理田村學務部長、渡邊營繕課長代理萩本泰一氏、片岡仁志校長、他職員一同
来賓	矢代仁兵衛氏、鈴木府立第一高女校長
設計者	府営繕課長代理萩本泰一氏、現場監督戸川正一氏
当社側	松村支店長、小山秀雄(主任)、島田欣二、後藤武雄、岡本幸太郎、西村利弘
下請側	松井豊吉(大工)、澁谷治三郎(鷹、土工)
工事概要	
建築地	京都市右京区常盤段ノ上町15
建築主	京都府知事 安藤狂四郎殿
監督	京都府営繕課
構造	木造瓦葺2階建
建坪	168.62坪
延坪	322.64坪
起工	16. 10. 7
竣工	17. 3. 31
主任	小山秀雄
現場員	宮本敏正、後藤武雄、岡本幸太郎、西村利弘、島田欣二(庶務)

竹中工務店『社報』(昭和17年5月号)

### 3. 片岡仁志（1902～93）の教育－西田哲学の教育実践－

ここに『片岡仁志先生の霊に捧げる』と題した冊子がある。平成5〔1993〕年5月19日、相国寺において梶谷宗忍（1914～1995）の下、片岡仁志の告別式が営まれた際、葬儀委員長を務めた大徳寺塔頭大仙院住職・尾関宗園が記し、参列者に配布されたものである。これを繙けば、簡潔にして要を得た片岡仁志の生涯を知ることができる。今、この冊子をもとに他の資料をも参照して、片岡仁志が嵯峨野高女の校長に招聘されるまでの前半生を記しておきたい（34）。

片岡仁志は、明治35〔1902〕年1月6日、父・片岡寅造、母・志宇の次男として、北海道石狩郡当別町で生まれた。大正7〔1918〕年、北海道庁立札幌第一中学校卒業後、北海道帝国大学予科に入学した。在学中に札幌円山の瑞龍寺住職・三浦承天（1872～1958）と出会い、ここから禅の道に入る。「当時の片岡の修行ぶりは、承天老師の指導の下、仲間を誘って雲水同様の生活を実践し、その厳しさのあまり肺を患い、療養のために学業を中断しなければならなくなるほど猛烈なものであった」という（35）。大正13〔1924〕年、京都帝国大学文学部哲学科に入学、西田幾多郎の門下生となる。また、当時、教育学部は存在せず、文学部哲学科に教育学の講座が開かれており、小西重直（1875～1948）に教育学を学ぶ。片岡仁志の就職のことを常に気にかけていたのは、この小西重直である。小西重直の紹介で沖縄県立女子師範学校教諭の職が決まる際に、片岡仁志の就職観を一変させたエピソードがある。



片岡仁志氏（『禅と教育』より転載）

昭和3〔1928〕年4月のことである。当時大学院で研究中であった片岡仁志は、「教師となることは学問片手のアルバイト」ぐらいにしか考えていなかった。小西重直の推薦により沖縄女子師範学校校長から鄭重な来任懇請を受けた片岡仁志は、「とても長く沖縄のお世話になれそうにも思えませんが、2・3年位でも差支えありませんか」と相談したところ、「それで結構です」という返答を得た。翌朝、片岡仁志は小西重直の自宅へ伺い「2・3年位でも差支えないとうことですから参ることに致します」と言い終わるか終らぬ前に日頃、温厚な小西重直に「君はそんなことを校長に言ったのか！私はもう君を推薦できません！」と一喝された。更に「何故沖縄の土になる決心で行けないのか！教育はその土地の土になる決心がつかなく



小西重直先生法要会場にて（昭和26年頃）。右端が片岡仁志氏、その一人おいて左の和服姿の人物が本校校歌作詞者新村出氏（『禅と教育』より転載）

ては出来るものではない！」という言葉で片岡仁志は「教育がかくも命がけの大業であるということを骨髓に徹して思い知らされた。」「われ過てり、という悔恨の情、慙愧の念」に襲われた片岡仁志は、数日後、思い直し「沖縄の土になるつもりで参ります」と伝えると、小西重直は「そうか、その決心がついたか、よかった、よかった」と手を握らなばかりに喜び、自分の夏洋服2着を与えた上に、翌朝、片岡仁志のところへ、洋服屋を差し向け、出発までに新着の洋服を作らせた。小西重直の「教育はその土地の土になる決心がつかなくては出来るものではない」という一言は、以後、片岡仁志にとって「終生片時も忘

れることのない言葉」となり、「官命によって幾度か学校は変わらされたが、いつも私にとってはその学校が唯一の死場所」と思い、教育に従事することになる。ここに「教育者として職につくということは、その土地の土になることである。その土地に骨を埋めることはもちろん、その土地を自己とし、自己をその土地と考えて、そこに終始するということが一番の信念でなくてはならない」という片岡の教職観が確立する(36)。

「この島に骨を埋め得ないような邪念を生じた時は、一切の教職から身を引く時」と決心して、昭和3[1928]年5月、沖縄に赴任した片岡仁志であったが、一年余りで健康を害し、翌年8月、沖縄女子師範学校を退職し、京都へ戻ってくる。小西重直の好意を無にしたと考えた片岡仁志は、相国寺山内、大光明寺に蟄居した。その後も小西重直は、片岡仁志の就職口を気にかけて続ける。昭和5[1930]年12月、長野県立実業補習学校教員養成所教諭の職を得た際も、小西重直がきっかけをつくり、西田幾多郎とも相談、片岡仁志本人とも相談した結果である。長野に職を得た片岡仁志は、昭和13[1938]年、長野県立長野高等女学校教諭、翌年6月、長野高等女学校校長事務取扱、昭和15[1940]年3月、長野県立野沢高等女学校校長と歩んでいく。片岡仁志は言っている。「私は、西田哲学というものを、実際自分で体得をしながら、これをできるだけ教育の実践の場に実現していきたいということが、最初からの念願でもありましたし、いつの間にかそういうことを自分の使命と感ずるようになってきた」と(37)。野沢高女の校長として、西田哲学を教育の場に実現しつつあるところに、突如、嵯峨野高女の校長の話が持ち上がる。長野に骨を埋めることに決めていた片岡仁志は、当然のことながら固辞した。「小西先生から命ぜられてもおそらく帰らなかったかも知れません」と片岡仁志は語っている。固辞する片岡仁志に西田幾多郎から京都嵯峨野に「特別な学校が創設されることになったので、その初代校長として誰を選ぶかということ京都府庁からも相談を受け、君よりほかに適任者は無いと思うので、いろいろ事情もあろうけれども、今度はこちらのみんなの言うことに従え(38)」という厳命が下る。片岡仁志にとって西田幾多郎の言葉は絶対であった。

12年間に及ぶ長野での生活を終え、昭和17[1942]年3月31日付で、片岡仁志は嵯峨野高女校長として京都へ戻ってきた。嵯峨野高女は、自らの教育理念を思う存分、実践できる場でもあった。片岡仁志の教育実践の基礎にあるのは、禅修行と西田哲学である(39)。教員の研修では、西田幾多郎の『善の研究』が使用されている(40)。恐らく片岡仁志自ら講義をしたのであろう。また、奥田正造『茶味』の輪読会も行われている(41)。

片岡仁志が教育実践において、先ず導入したのが、相国寺における参禅、宿泊訓練である。昭和17[1942]年7月23日より25日までの3日間、第2学年150名が参加している。毎朝午前4時に起床、午後8時の就寝まで、山崎大耕管長等の講話を聴講し、坐禅、作務が続き、時間的な余裕は全く無く、緊張して修養に努め、3度の食事は教職員が給仕をする。教員生徒ともに手を取り合って禅堂の生活を味わったことは教育的にも頗る意義深いものがあった。一女子生徒が「相国寺参禅の想出」と題する文を残している。



相国寺宿泊訓練。教員が給仕を担当。

「私達二年生は夏休みの行事の一つとして相国寺に於て二泊三日の修養会を開きました。

…(中略)…今迄禪の修業といへば皆すぐ坐禪と口癖のように言って居りますが、…(中略)  
…なんでも物事を行う時は其の仕事に対し、熱心にすることが皆修業の中に入っている事が分かりました。

例へばお庭の除草、お部屋のお掃除をすることなどと言ってみな修業の中の一つとなって居ります。けれど私は何と言っても坐禪は心の修養には一番大切の様に思はれます。今少し朝の坐禪の様子を申しあげますと、私達は朝四時に起され、緊張した気持で十分間以内に顔を洗ひました。…(中略)…始めの中は心も落ち着かず、あたりもそわそわして居りましたが、あたりも大分静かになったと思われる頃、私たちは聖典を手に手に合図によりお経を読みはじめました。…(中略)…

朝四時と言ふとまだ暗いのに、お経が読み終はると電燈を消される。そこで始めてほんたうの明るさを知り、太陽の光の有難さなどをつくづく感謝しました。私はこの様な感謝の気持を持つ事の出来たのも、ほんたうに静かな所で坐ったからこそ味へたのだと思はれました。…(中略)…

最後の方はさすがの私も自覚し『自分は今何をすべきか。』と考えて、一所懸命坐り知らぬまに時を過ごし、あたりの空気も大分にごりを帯びたと思はれる頃、朝の坐禪は終りました。…(中略)…

この三日間にはいろいろと得る処があったと思はれます。

先ず物に対しての感謝の気持を大変強く感じました。…(中略)…また太陽の様に大きな力を持つものを知らずぼんやり日常生活を送って来た事を反省出来たと同時に、大自然すべてに有難く思はなくてはいけないと思ひました。…(中略)…」(42)

禪の世界では、「一作務、二坐禪、三看経」と言われ、作務が修行のなかで最も大切なことと考えられている。相国寺の宿泊訓練には、この三者が実施されていることが分かる。作務が最も重視されるのは、庭を掃除したり、畑を手入れすることは具体的な物に接することになるので、それだけ余計なことを考えず、その事に身心を投入しやすい状況が生まれるからである(43)。また、学校においても毎週火曜・木曜の始業前30分間、静座をする時間も設けている。

また、片岡仁志は、徹底した掃除を生徒に求め、「校舎内の柱や廊下は毎日の清掃時に全員がぬか袋や椿の実を用いて磨きあげピカピカに光り顔もうつつの様でした(44)」、「昭和十九年四月に入学を許可された私たち百五十二名は、ピカピカに磨かれた廊下の美しさに目をみはったものです。『照顧脚下』の立札をみて、すぐには意味がわかりませんでした。何となく理解できて厳粛な気持にさせられたものです(45)」、「中でも何より大きな教えを受けたのは、奇麗に磨き上げられた教室の床であった。それは先生の女学校での教育が何であったかを力強く物語るものであった(46)」といった具合である。物をピカピカにすることを通して、ピカピカにする人自身もピカピカになると、片岡仁志は教育の本質をこのように考えた(47)。

片岡仁志は『無に生きる』という小冊子を知人や教え子に配布している。「無に生きる」の「無」の状態とはどのような状態をいうのであろうか。西村睦男(1944.4~1948.3、嵯峨野高女に在職)の証言によると、「徹夜で勉強をしたことがあるでしょう。その時はつと気がついたら夜が明けていた。その時、私という意識は有りましたが、無かったです。時間という意識も無かったです。勉強をしているという意識も無かったです。」

それが無の状態です」と語ったという(48)。同じく西村睦男の証言によると、ある時、片岡仁志は、校長の仕事及び自分の求める教師像について話したという。「校長の一番大事な仕事は、全国からいい先生を集めて来ることである。いい先生とは、本気でやる先生で性格は問題ではない。本気でやる対象は何でもよい。例えば、『授業』を本気でする先生、『進学指導』を本気でする先生、『クラブ活動』を本気でする先生、『研究』を本気でする先生でもよい」と話したという。大学は研究機関であるけれども、中学校・高等女学校といった学校は教育機関である。研究に先生が時間を取られると教育の方がお留守になるというのが当時の一般的な風潮のなかで、片岡仁志は「大事なものは先生の姿である。真摯に『研究』に打ち込んでいる先生の姿を見せることも大事なんだ」と言ったことに西村睦男は感心したと述懐している(49)。

最後に、西田幾多郎が嵯峨野高女に講話に来た事について記しておきたい。西田幾多郎が嵯峨野高女に講話に来た事は、何人かの証言がある(50)。教え子の一人は、「晩年の西田幾多郎先生を、学校にお迎えした時、片岡先生が西田先生のお手を大事におとりになって、抱える様にして教壇へ案内なさったことを、今もよく覚えています。伺った筈のお話は忘れてしまいましたのに……」と記している(51)。また、西田幾多郎の「日記」にも簡単ながら記載がある。昭和19[1944]年6月4日の記事に「四日(日)雨。片岡来り、嵯峨野高等女学校へ行く」とあり、その前々日にも「二日(金)片岡仁志来訪」と記されている(52)。恐らく、二日の金曜日は、事前の打ち合わせか、あるいは西田幾多郎の様子を見に行ったのであろう。片岡匡三の証言によれば、講話当日、恩師西田幾多郎を迎えに自宅まで赴き、嵯峨野高女内で、片岡仁志は、西田幾多郎を背負って会場の礼法室まで案内したそうである。北野裕道は、「西田は信濃哲学会など特別な場合を除けば、ほとんど講演の類は引き受けることがなかった。そういうことのために、大切な思索の時間を割かれなくなかったからである。だから西田が嵯峨野高女で女生徒を前にして講話をしたことは、高齢のことや病弱であったであろうことなども考えに入れれば、よほど特別のことであったと考えねばならない。それには、西田が直々に自分の門下である片岡をその校長として招聘した、肝いりの学校であったということがあったであろう。それに対して、偏に生徒たちのために最高の教育を提供しようとした片岡の熱意に応えようとして、無理を押しつけて講話に来てくれた恩師に対する門下生片岡のあの甲斐甲斐しい態度はどうであろう。そこに、この上なく美しい師弟愛を見る思いがするのである」と述べている(53)。この時、西田幾多郎が嵯峨野高女の女生徒に講話をした内容は、「『疾きこと風の如く、徐かなること林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く、云々』という句を説明しつつ、『孫子の兵法について』先生にはめずらしく大変わかりやすく話して下さいました」という片岡仁志談の証言を得ている(54)。女生徒に対する講話の後、職員に対して西田幾多郎が「教育の理念は、日本という狭い枠に捉われずに、世界史的立場に立つものでなければならない」という話をしたそうである(55)。

かくして、「公立のよいところと、私学のよいところとを、抱き合わせた校風の学校創設」という矢代仁兵衛の「念願」、西田哲学を教育の実践の場を実現していきたいという片岡仁志の「念願」、この二人の「念願」は、ここ嵯峨野の地において実を結んだのである。

## おわりに

戦後の学制改革で小・中学校が義務教育とされ、昭和22[1947]年、中学校（当時は、新制中学と呼ばれた）が設立された。新制中学は、新たに設立されたものは少なく、多くは、国民学校（小学校）・旧制中学・高等女学校内に併設された。昭和22年、嵯峨野高等女学校の中に京都市立嵯峨野中学校が併設されたが、中学校は独立校舎をという軍政部の義務教育優先政策により、昭和23[1948]年3月31日、嵯峨野高女は廃校となり、4月より、嵯峨野高女は、嵯峨野中学校の独立校舎となった。この時、嵯峨野高女の生徒は、府一（昭和23年4月、鴨沂高校と改称）に吸収された。嵯峨野高女の生徒を受け入れた鴨沂高校の校長は、奇しくも昭和21[1946]年4月、嵯峨野高女から異動していた片岡仁志であった。同年10月、総合制・地域制（小学区制）・男女共学という高校三原則に基づき、教員・生徒ともに大規模な異動があった。片岡仁志は、この時、西京高校の校長として異動している。地域制に基づき、鴨沂高校から西京高校へ半ば強制的に転入させられた生徒も多い。そして、昭和25[1950]年4月1日、嵯峨野中学校に転用されていた嵯峨野高女の校舎は、嵯峨野高校となり、嵯峨野中学の生徒は、蜂ヶ岡中学校へ転入させられた。ここに一旦廃校となっていた嵯峨野高女は、嵯峨野高校として復活するのである。この間の複雑な事情は、次号において述べる。

最後に、本稿は、昨年来、本校国語科教諭・多田英俊と共同で調査してきた結果を筆者が纏めたものである。次号においては「新村出と嵯峨野高校―校歌制定秘話―」（仮題）と題して、多田英俊と共同執筆する予定である。

## 【注】

- (1) 矢代仁兵衛『樂獨』（誉仁株式会社、1969）34頁。
- (2) 『嵯峨野』は嵯峨野高女の学校機関紙で、開校当初は学期に1回発行されている。本校図書室に創刊号～第3号、5号～8号を所蔵している。創刊号は昭和16年7月14日、第8号は昭和19年1月20日に発行されているが、何号まで発行されたかは不明である。当時の嵯峨野高女を知る上での貴重な資料である。
- (3) 『嵯峨野新聞』は、昭和25年4月に創部された嵯峨野高校新聞部が発行したもので、生徒が取材・執筆をしている。図書室には、6号～12号、14号～15号、17号～22号、25号～34号、37号～48号、50号～55号、58号、60号、62号～65号、69号～74号を保存している。因みに、6号は昭和25年12月8日発行、74号は昭和45年3月1日発行である。
- (4) 矢代仁兵衛「現代人は宗教を求めている！」（『自愛』矢代本社、1972）32～38頁。
- (5) 矢代仁兵衛「喫茶去」（『自愛』矢代本社、1972）39～41頁。
- (6) 『樂獨』（誉仁株式会社、1969）は、レ点とフリガナが付され「獨ヲ樂シム」と読ませているが、本稿では単に『樂獨』と記す。『自愛』（矢代本社、1972）は、同人誌等に寄稿した原稿や諸誌に記載されたものを纏めた随筆集である。上記二つの著書以外に矢代仁兵衛に関する資料として、“偲び草”編集小委員会編『矢代仁兵衛翁を偲ぶ』（矢代本社、1978、2000再発行）がある。これらの書籍の入手は極めて困難であったが、筆者は偶然、古書店にて『樂獨』を入手した。『自愛』及び『矢代仁兵衛翁を偲ぶ』は、株式会社「矢代仁」の代表取締役社長矢代一（第九代矢代仁兵衛）氏より拝借した。この場をかりて深謝する次第である。

- (7) 矢代仁兵衛「嵯峨野に学校創設の由来」(『樂獨』 誉仁株式会社, 1969) 12~16 頁。
- (8) 渡辺一雄『杉浦重剛の生涯』(毎日新聞社, 2003) 参照。
- (9) 矢代仁兵衛「七七禁令と嵯峨野高校創設」(『樂獨』 誉仁株式会社, 1969) 9~11 頁。
- (10) 平安神宮の本殿は、昭和 15 年~昭和 51 年までは、東西分離型の本殿で、東本殿に桓武天皇、西本殿に孝明天皇が鎮座。昭和 51 年に本殿が放火され、昭和 54 年に復興された時、本殿が 1 棟となり、東御座に桓武天皇、西御座に孝明天皇が鎮座している。
- (11) 平安神宮及び孝明天皇奉祀奉賛会に関する本稿の記述は、すべて平安神宮・南坊城卓英氏の御教示に拠るものである。昭和 12 年~昭和 17 年までの近衛文麿の動向を社務日誌等を調べていただくなど多大の御尽力を得た。ここに記して謝意を表する次第である。
- (12) 「大市」は、元禄年間創業のすっぽん料理専門店で、メニューはコース料理唯一つである。住所は「京都市上京区下長者町通千本西入ル六番町」であり、南禅寺畔とは到底言えない。筆者は、この界隈で生まれ育ち、幼い頃より周囲の人から「大市」には、幕末、新撰組の近藤勇が酒に酔って、名刀「虎徹」で柱に切りつけた傷跡があると聞かされていたが、確認していない。蛇足ながら「大市」からほんの少し北に上がった地区が、水上勉の『五番町夕霧楼』で有名な五番町である。
- (13) 聡明な読者はお気づきのことと思うが、名和修氏は昭和 28 年の「第 4 回入学式」の入学生であるが、「第 5 回卒業生」であることを不思議に思われるかもしれない。昭和 25 年 4 月、誕生した新制嵯峨野高校は、2 年生 150 名 (3 クラス)、1 年生 243 名 (5 クラス) で出発した。この時の 2 年生が第 1 回卒業生であり、昭和 25 年の第 1 回入学式で入学した 1 年生が、第 2 回卒業生となる。従って、嵯峨野高校の場合、入学回と卒業回が一致しない。なお、昭和 25 年 4 月の 2 年生というのは、1 年次、西京高校、山城高校などに在籍しており、地域制に基づき、半ば強制的に嵯峨野高校に編入された生徒である。この間の複雑な事情は、次号で詳述する予定である。
- (14) 名和修氏の御教示によると、「近衛文麿公は『岡崎つる家』をよく利用していた」とのことであつたので、「岡崎つる家」に尋ねてみたが、記録は残っていなかった。
- (15) 「厳中慈」(『樂獨』, 17 頁)。「厳中慈」の典拠は、江戸後期の儒学者・佐藤一斎 (1772~1859) の『言志晩録』229 条「父道当厳中存慈。母道当慈中存厳。(父道は、当に厳の中に慈を存すべし。母道は、当に慈の中に厳を存すべし)」にある(『佐藤一斎・大鹽中斎』(日本思想体系 46 巻, 岩波書店, 1980, 143 頁・266 頁)。
- (16) 上田久『山本良吉先生伝』(南窓社, 1993) 71 頁。なお、山本良吉に関しては、兵頭高夫「山本良吉小論」(『武蔵大学人文会雑誌』第 37 巻第 4 号, 2006) も参照。
- (17) 西田幾多郎は、「当時の文部大臣は森有礼といふ薩摩人であつて、金沢に薩摩隼人の教育を注入すると云ふので、初代校長として鹿児島県の県会議長をしていた相田といふ人をよこした。その校長について来た幹事とか舎監とかいふのは、皆薩摩人で警察官などしてみた人々であつた。師弟の間に親しみのあつた暖かな学校から、忽ち規則づくめな武断的な学校に変じた。我々は学問文芸にあこがれ、極めて進歩的な思想を抱いてみたのであるが、学校ではさういう方向が喜ばれなかつた。その上、当時の我々から見ても学力の十分でない先生などあつて衝突することも多かつたので、学校も不満に思う様になつた。特に山本君は何事にも独自の見解を有し、人に屈せなかつた人故、学校が面白くなかつた。さういう訳で山本君が先づ学校をやめた。そして私も之に次いでやめた」と記している(西田幾多郎「思出話」、上田久, 前掲書に収録、

238～239頁)。なお、鈴木大拙は学資が続かず明治21年7月に退学、山本良吉は翌22年2月頃に退学、西田幾多郎も落第後、明治23年5月に退学している。

(18) 鈴木大拙「思出話」(上田久, 前掲書に収録, 242頁)。

(19) 鈴木脩蔵「矢代さんと私」(『嵯峨野の道』京都府立嵯峨野高等学校, 1962, 所収) 14～19頁。

(20) 昭和15年4月8日, 東舞鶴中学校は, 中舞鶴小学校を仮校舎として入学式を挙行, 翌日から授業を開始, 同年4月8日, 東舞鶴高等女学校は, 倉梯小学校を仮校舎として入学式を挙行, 翌日から授業を開始した。昭和18年6月1日, 東舞鶴中学校は, 舞鶴第二中学校, 東舞鶴高等女学校は, 舞鶴第二高等女学校と改称した。

(21) 鈴木脩蔵「浮草ところどころ」(『流水』流水会, 1969) 所収, 197～215頁。

(22) 川瀬章一「当時をしのび」(『嵯峨野の道』京都府立嵯峨野高等学校, 1962) 所収, 21～23頁。

(23) 第五中学校にたどりついた経緯を述べておきたい。方法として, 学校建設から探る・人物から探るという二つのルートを考えて。まず, 京都府教育研究所『京都府教育史 戦後編』(1956)に記されている学校の沿革等を調べてみたが, 該当しそうな学校は見当たらなかった。あるいは建設されなかったのかもしれないとも思ったが, 鈴木脩蔵が「川瀬君が新設男子中学校の校長になった」(上記, 「矢代さんと私」)と記し, 川瀬章一も「私が教員, 府職員, 校長, 教育長とこうした歩みが続けた一生の間には色々の思い出があります」(上記, 「当時をしのび」)と記していることから, 川瀬章一が校長になったことは間違いない。そこで人物から探ることにした。ネットで検索をかけると, 川瀬章一は, 昭和21年4月から昭和22年4月まで京都第三中学校(現, 山城高校)の校長に就任していることが確認された。三中は明治40年の創設であるので, 新設校には該当しない。そこで, 山城高校に川瀬章一の前歴の記録が残っていないかどうか問い合わせたが, 資料は残っていなかった。今度は, 川瀬章一が教育長になっていることを手掛かりに, 歴代の京都府教育長を調べたが, 川瀬章一なる人物はいない。戦後間もなくの頃は(恐らく昭和31年9月1日, 京都市が政令指定都市になる以前まで), 府と市の人事交流は頻繁にあることから, 京都市の教育長かも知れないと思い, 京都市学校歴史博物館に問い合わせたが, 歴史博物館にはその記録はなく, 京都市教育委員会総務課ならわかるのではないかと御教示いただいた。そこで市教委総務課に問い合わせたところ, 昭和30年に川瀬章一が教育長であったことが判明した。しかし, その前歴までは分らず, 人物ルートからの調査はここで頓挫した。学校建設ルートで調べることにした。京都府議会図書館に昭和16年度の予算書が残っているかを問い合わせたところ, 「京都府会会議録」があり「高等女学校建築費として昭和16年度20万円, 17年度20万円, 18年度10万円。中学校建築費として, 昭和16年度30万円, 17年度30万円, 18年度27万円」計上されていることが判明した。予算書には「中学校建築費」としか記載がないが, 予算書に添付されていた「府有財産表」に, 「京都第五中学校 昭和16年10月20日現在, 土地坪数9107.48, 昭和17年10月20日現在, 建物坪数459.70, 昭和18年10月20日現在, 建物坪数588.70, 昭和19年10月20日現在, 建物坪数1015.10」とあることから, 昭和16～18年年度の予算通り建物が建築されていることが判明した。また, 第五中学校の記念碑が, 京都市立桂中学校(開校当初の校名は, 上桂中学校)に建立されていることも判明。その碑文によれば, 間違いなく昭和16年, 嵯峨野高女と同時期に開校されていることが確認できた。これらのことは, 京都府議会事務局調査課で調査していただいた結果, 判明した。最後に, 桂中学校に第五中学校の資料が残っているかを桂中学校に問い合わせたところ, 桂中学校史なるものをお調べいただき, そのなかに第五中学校初代校長「川瀬章一」と記されているとのことであった。かくして, 嵯峨野高女のい

わば兄弟校は、第五中学校であることが確認できたのである。なお、調査にあたって、公務御多忙のなか、筆者の依頼に御協力いただいた方々に謝意を表する次第である。

- (24) 竹中工務店「歴史アーカイブG」という部署で調査していただいた。記して謝意を表する次第である。
- (25) 戦前においては、公立・私立に関係なく他府県から教員・校長等を招聘することが行われていた。例えば、神戸の私立灘高校の前身である旧制・灘中学は、昭和2年の創立だが、初代の校長として招聘されたのは、38歳の若さで京都府立亀岡高等女学校の校長を務めていた真田範衛である。彼は「灘中を必ず日本一の学校にしてみせる。君たちがこの学校に来たことを、後悔しないようにしてやる」というかけ声のもとに、良い先生を集めて教育に励んだという(橘木俊詔『灘中—なぜ「日本一」であり続けるのか—』光文社新書、2010、12頁)。
- (26) 片岡仁志「矢代仁兵衛氏頌徳の建碑に寄せて」(『嵯峨野の道』、1962)所収、24~30頁。
- (27) 鈴木脩蔵、注(19)掲載論稿。
- (28) 田中九三『九十年の思い出—私の自叙伝』(福岡タイムズ、1986)97頁。田中九三氏は、嵯峨野高等女学校の後、昭和19年4月より中舞鶴高等女学校校長、昭和21年4月、体調不良と「米国式の民主教育には何となく付いていけない」ため退職、郷里の長崎県へ帰郷された。
- (29) 奥田正造『茶味』(成蹊叢書、1920、鎌倉書房より再版、1946)13~18頁。
- (30) 川瀬章一、注(22)論稿、22頁。
- (31) 第1回入学考査の合格者の出身小学校は以下のとおりである。

京都市

男師附小	2	仁和	2	聚楽	1	衣笠	3	第二衣笠	1	室町	1
第二室町	2	北白川	2	下鴨	2	第二下鴨	2	修学院	1	女師附小	2
翔鷺	1	龍池	3	柳池	1	錦林	1	第二錦林	3	第三錦林	1
第四錦林	2	乾	1	日彰	1	嵯峨	4	大内	2	大内第三	1
桂	1	新洞	1	桃園	2	郁文	2	成徳	1	粟田	4
弥栄	3	第一高等	5	第三高等	3	朱雀第一	2	朱雀第二	4	朱雀第三	3
朱雀第四	2	朱雀第六	1	朱雀第八	1	修徳	2	植柳	3	皆山	1
九条	1	九条第二	1	七条	1	御室	6	伏見第二	1	伏見第三	1
深草第一	6	深草第二	3	正親	2	待賢	1	小川	1	梅屋	2
第二養正	1	春日	2	初音	1	明倫	1	吉祥院	2	醒泉	1
出水	4	西陣	1	城巽	1	淳和	2	格致	1	立誠	3
永松	1	修道	2	川岡	1	淳風	1	有隣	1	安寧	1
高雄	1	梅逕	1	陶化	2	陶化第三	1	太秦	7	太秦第二	2

小計 150

京都府下

乙訓郡石作	1	乙訓郡大藪	1	北桑田郡周山	1	久世郡槇島	1
-------	---	-------	---	--------	---	-------	---

小計 4

管外

大阪府高田	1	佐賀県有田	1
-------	---	-------	---

小計 2

- (32) 「発表の日」(『嵯峨野』創刊号、昭和16年7月14日発行)4頁。
- (33) 現存する茶室「里仁軒」は、昭和18年6月、矢代仁兵衛氏が今出川新町の佐々木藤左衛門氏の茶室を譲り受けられ学校内に移築したものではないかと思われるが、確証はない。
- (34) 『片岡仁志先生の霊に捧げる』は、本校理科教諭・片岡敬志氏にお願いして、御尊父片岡匡三氏(片岡仁志氏の嗣子)より拝借した。聞くところによると、片岡匡三氏は、筆者の要望を受け、直接、尾関宗園師からお借りいただいたそうである、御迷惑をおかけした方々に対し、謝意を表するとともに、御礼申し上げる次第である。なお、片岡仁志に関する論考として、以下のものを参照した。北野裕道「京都哲学と労作教育—片岡仁志・小西重直・西田幾多郎—」(『相愛大学・研究論集』第22巻、2006)、同「片岡仁志—禅・哲学・教育」(上田閑照監修『禅と京都哲学』

燈影舎, 2006), 同「西田直門 片岡仁志先生 (一)」(『禪文化』209号, 2008), 同「西田直門 片岡仁志先生 (二)」(『禪文化』210号, 2008), 同「西田直門 片岡仁志先生 (三) 最終回」(『禪文化』211号, 2009), 山田邦男「無に生きる一片岡仁志と西田幾多郎」(上田閑照監修『禪と京都哲学』燈影舎, 2006)。

(35) 北野裕道「西田直門 片岡仁志先生 (一)」(『禪文化』209号, 2008) 50頁。

(36) 片岡仁志「小西重直教授の生涯と業績」(『京都大学教育学部紀要』4号, 1958)。

(37) 片岡仁志「西田哲学と発展」(『禪と教育—片岡仁志の世界—』(燈影舎, 1994) 329~330頁。

(38) 片岡仁志「西田哲学と発展」(『禪と教育—片岡仁志の世界—』(燈影舎, 1994) 331頁。

(39) 山田邦男「無に生きる一片岡仁志と西田幾多郎」(上田閑照監修『禪と京都哲学』, 燈影舎, 2006) 所収, 294~315頁。

(40) 片岡仁志『禪と教育—片岡仁志の世界—』(燈影舎, 1994) 389頁, 391頁, 424頁。

本書は、「片岡仁志の追悼文集」であり、「教育の根本としての人格」, 「知と愛の教育」, 「禪と教育」, 「人格性に就いて」, 「西田哲学のその発展」という片岡仁志の論考が5本収録され, 教え子や親戚縁者など多くの人々の思い出の記が収録されている。

(41) 『嵯峨野』第5号(昭和17年12月11日発行)を見ると, 「毎週一回水曜日の職員会には輪読会を催して居ります。已に奥田正造氏『茶味』は殆んど終わり近く迄読了致しました。」という記事がある。

(42) 「相国寺参禅の想出」(『嵯峨野』第5号, 昭和17年12月31日発行) 7~8頁。

(43) 北野裕道「片岡仁志—禅・哲学・教育」(上田閑照監修『禪と京都哲学』, 燈影舎, 2006) 所収, 272~293頁。

(44) 片岡仁志『禪と教育—片岡仁志の世界—』(燈影舎, 1994) 390頁。

(45) 片岡仁志, 同上, 413頁。

(46) 片岡仁志, 同上, 417頁。

(47) 北野裕道, 注(43)論考。

(48) 西村睦男「校長さんは禅居士 片岡仁志の実践」(NHK『こころの時代~宗教・人生~』1994年10月9日放映)。

(49) 同上。筆者は, 嘗て北嵯峨高校に勤務していたことがある。その時の校長が片岡匡三氏であった。片岡匡三校長に所用があつて校長室をたずねると, 先ず, 一服お茶を点てくださり, 然る後, 話を始めるという経験が何度かある。恐らく, 片岡家の家風は「茶道・禅・剣道」なのではないかと, 本稿を執筆して思いついた。ある時, 校長から「君は研究に励んでもらえばよい」と言われたことがある。その源は片岡仁志氏にあることが今にしてわかった。ただし, 筆者の研究態度は残念ながら「本気さ」が不足していた。「われ過てり, という悔恨の情, 慚愧の念」を禁じ得ない。

(50) 片岡仁志『禪と教育—片岡仁志の世界—』(燈影舎, 1994) 402頁。

(51) 片岡仁志, 同上, 407頁。

(52) 『西田幾多郎全集』第17巻(岩波書店, 1966) 686頁。

(53) 北野裕道「西田直門 片岡仁志先生 (二)」(『禪文化』210号, 2008) 114~115頁。

(54) 片岡匡三氏は, 片岡仁志氏より生前, このような話を聞いているとのことである。

(55) 京都学派が使用する「世界史的立場」という用語については, 森哲郎編『世界史の理論—京都学派の歴史哲学論攷』(燈影舎, 2000) を参照。